医療最前線

褥瘡（じょくそう）について

浅海良昭　医師

■褥瘡の発生

褥瘡とは、寝たきりなどの理由により、体重で圧迫されている場所の血流が悪くなったり滞ったりすることで、皮膚の一部に赤みやただれが発生し傷ができてしまうことです。ひどくなると、潰瘍（かいよう）や細菌感染を生じる場合もあります。

褥瘡はなぜできるのでしょうか？私たちは無意識のうちに、眠っている間は寝返りをうったり、長時間椅子に座っているときはおしりを浮かせるなどして、同じ部位に長時間の圧迫が加わらないようにしています。

しかし、自分でこのように体を動かす事ができない高齢の方、あるいは脳卒中、脊髄（せきずい）損傷、神経筋疾患などをもった方は、体重で長時間圧迫された皮膚の細胞に十分な酸素や栄養が行き渡らなくなり、その結果、褥瘡を生じるようになります。

寝ている際に床と接する部分は特に圧迫がかかりやすく、骨の出っ張りがある部分（仙骨部、かかと、ひじなど）に褥瘡を認めることが多いです【図1】。

■褥瘡の症状

症状としては、急性期には皮膚の赤み【写真1】や水ぶくれが生じ、進行すると表皮剥離などの傷ができます。さらに進行すると【写真2】、組織が壊死（えし：体の一部の細胞が死んだ状態）したり感染したりして深部へと進展し、筋肉や骨まで達することもあります。また、ポケット状に水平方向へ進展するものもあります【写真3】。

重症化すると治癒するのにかなりの時間を要するだけでなく、骨髄炎や敗血症といった全身疾患へと進展し生命に関わることもあります。早期に発見し適切な治療を受けることが大切です。

■褥瘡の治療

治療としては、まず圧迫の軽減を図ります。同じ部位がいつも圧迫を受けないように体の向きを変えたり、圧迫を軽減するようなマットレスやベッド、クッションを導入することも大切です。それから、栄養状態が悪いと褥瘡の治りが悪くなるため、栄養状態を評価して改善していくことも重要です。さらに、汗を多くかいていたり、排泄物が付着していたりすることもよくないため、清潔を保つようにします。

次に、褥瘡の傷に対して大切なことは、患部を生理食塩水か水道水で洗い流すことです。水道水と聞くと不安に思われる方もおられるかもしれませんが、問題はありません。せっけんを用いて洗っても構いませんが、ただし消毒は、ばい菌だけでなく傷自体にも害を与えるため、推奨されていません。

また、黒くなった壊死組織がある【写真4】と、傷の回復を妨げるばかりでなく細菌感染の温床になりますので、デブリードマン（壊死組織を外科処置などで取り除くこと）も大切です。

感染が疑われる場合は、培養検査を行って菌を特定して効果のある抗生物質を投与したり、感染制御作用のある軟こうを塗布することもあります。

傷の再生には適切な湿潤環境が必要です。乾燥や過度に傷から染み出る液は、傷の再生を妨げます。そのため、傷の状態に応じて適切な軟こうを選択して塗布し、適度な湿潤環境を保ちます。さらにドレッシング材（傷を覆う医療用材料）を用い、外部からの刺激や細菌の汚染を防ぐと同時に、適切な湿潤環境を保ちます。

これら治療を毎日繰り返すことによって、徐々に肉芽組織や新生表皮が出現し治癒の方向へと向かいます。

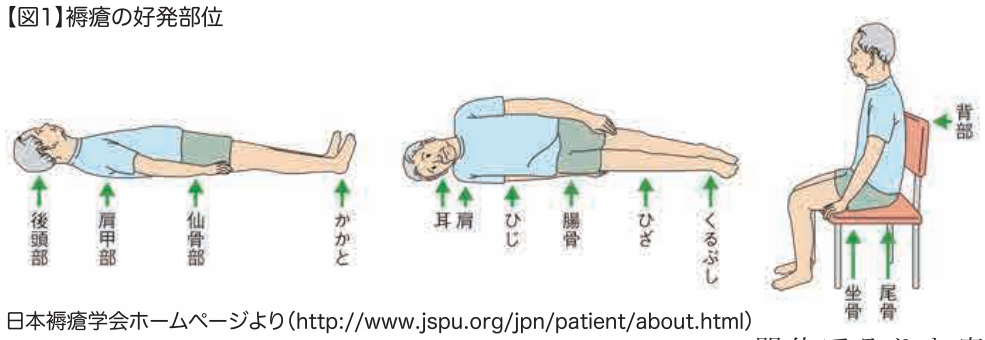
■褥瘡のケア

最後になりますが、褥瘡のケアにはいろいろな要素が必要です。ベッド上でのポジショニングであったり、栄養管理であったり、適切な軟こうや薬の選択であったり、毎日の傷の観察や処置であったり、場合によっては外科的治療であったりします。

そのため褥瘡のケアには多職種が関わってチーム医療を行い、問題点の検討、治療が適切か否かなどの話し合いを行うことが必要です。当院では医師、薬剤師、看護師、理学療法士、管理栄養士、ソーシャルワーカーでチームを結成し、褥瘡対策チームとして意見交換や情報提供、病棟の見回りを行い、院内発生ゼロ、治癒率１００％を目指して日々努力しております。

〈梶川病院（広島市西区天満町）医師　浅海良昭〉

【図1】褥瘡の好発部位



日本褥瘡学会ホームページより（http://www.jspu.org/jpn/patient/about.html）

【写真1】皮膚の赤みがある

【写真2】潰瘍が形成された状態

【写真3】マーカーの印までポケットが形成されている

【写真4】黒い部分が壊死している箇所

月刊 ウェンディ広島　編集・発行 合人社グループ 出版局　〒730-0036 広島市中区袋町4-31 合人社広島袋町ビル　☎082(247)7479